DPRKにおけるマルクス主義

井上周八

目次

一、DPRKにおけるマルクス主義の継承と発展
二、人間の本質について
三、革命理論について
四、意識論・認識論について
五、思想構成とその内容について

DPRK (Democratic People's Republic of Koreo) におけるマルクス主義の創造的発展については、本誌前号でも、その一端を紹介したが、本稿においてはさらに若干の重要な諸論点について検討しよう。

筆者はDPRKを屢々訪れ、かの地の学者と深く交流することができたが、以下はそのささやかな成果の一部である。

一、DPRKにおけるマルクス主義の継承と発展

DPRKの指導思想は、その憲法で規定されているようにチュチェ思想である。

チュチェ思想は歴史上はじめて、人間中心の新しい哲学を展開したが、それはマルクスレーニン主義の独創的な発展としての哲学である。

金日成主席が「マルクス・レーニン主義的チュチェ思想」と述べているように、チュチェ思想とマルクス・レーニン主義は深い関係をもっている。

チュチェ思想はマルクス・レーニン主義を継承していると同時に、マルクス・レーニン主義を朝鮮の現実に創造的に適用して独創的に発展させた新しい思想である。

一般的に、すべての新しい思想は、何もないところから生まれるものではない。マルクス主義もそうであったように、新しい思想はそれ以前のすぐれた思想的成果を継承発展させたものである。その際、新しい思想は、それ以前の思想と必ず共通の側面をもつものである。このような共通性がなければ、新旧両思想の間に継承性などありえない。しかし、継承性のみがあって独創性がなければ、およそ思想の発展などという言葉は無意味である。

ある思想が先行思想の正しい継承に基づく独創的な思想でなければ、それは新しい思想とはいえず、したがって新しい時代の要請に応えることはできない。

マルクス・レーニン主義者として朝鮮革命の道を開拓した主席が、マルク・スレーニン主義の普遍的真理を朝鮮の現実に創造的に適用する過程で、何よりも人間（人民大衆）を基本としてつくりあげた人間中心の独創的な思想、それがチュチェ思想である。

したがってチュチェ思想の独創性を理解するにあたって、チュチェ思想と従来のマルクス・レーニン主義との関係を正しく把握することが重要である。

金日成主席はマルクス・レーニン主義者として朝鮮革命の途を歩み始めたのであるが、主席の指導のもとに闘った朝鮮の共産主義者たちも、過去においてと同様に現在もマルクス主義を支持し継承しながら、それを独創的に発展させつつある。したがって、朝鮮ではチュチェ思想とマルクス主義が対立した関係として問題にされたことはない。もちろんマルクス主義は単なる教条ではなく、世界変革のための実践哲学なので、その幾つかの側面が各国に置かれた主体的・客体的諸条件に応じて創造的に適用され、発展させられなければならないのは、マルクス主義自体の要求するところである。

しかし、現実においてマルクス主義を正しく継承すると同時に、マルクス主義をその幾つかの側面において独創的に発展させることは容易なことではなく、ましてやマルクス主義を原理的に、かつ独創的に発展させることは、偉大な革命的思想家によってのみ可能なことといえよう。

チュチェ思想は金日成主席がマルクス主義を正しく継承し、かつ独創的に発展させた思想である。

私たちはチュチェ思想を学ぶにあたって、継承性と独創性を正しく理解しなくてはならない。

チュチェ思想とマルクス・レーニン主義との関係は、継承性を無視して、独善的に独創性の見地でのみ見てはならない。しかし、逆に独創性をないがしろにし、継承性を強調しすぎてもならない。このように継承性と独創性をみなければならないのであるが、この二つの思想をみる立場の基本は、あくまでも独創性である。

金正日書記は次のように述べている。

「独創性を基本にし、これに継承性を結合して考察すること、これが金日成主義とマルクス・レーニン主義との関係を理解するうえで堅持すべき原則的な立場であります」(「金日成主義の独創性を正しく認識するために」)

ではチュチェ思想はどのようにマルクス主義を継承し、どのようにそれを独創的に発展させたのであろうか。

マルクス主義とチュチェ思想の重要な一致点の第一は、マルクス主義も労働者階級の思想であり、チュチェ思想も労働者階級の思想であって、この二つの思想はともに共産主義社会の実現を目的としているということである。したがってチュチェ思想とマルクス主義とはその階級的基礎も目標も同一であり、決して対立した関係にはない。

そもそも革命思想間の継承性は、その思想の階級的理念と使命の共通性に基づいて成り立つものである。労働者階級の革命偉業は一つの歴史的時代で終わるのではなく、歴史の幾つかの段階を経て遂行される長期の事業である。したがって労働者階級の革命闘争は継承性をもって発展しなければならず、労働者階級の革命思想も旧時代から新しい時代へと一定の継承性をもって発展しなければならない。

チュチェ思想は、朝鮮においてマルクス・レーニン主義が達成した思想的・理論的業績が擁護され具現される過程で創始され発展させられた思想であり、労働者階級の革命偉業に奉仕する階級的理念と使命においてマルクス・レーニン主義とまず第一の共通性をもつものである。

マルクス主義とチュチェ思想の一致点の第二は、世界に対する見解の同一性である。マルクス主義は唯物弁証法を基礎としており、チュチェ思想も同様に唯物弁証法を継承している。

チュチェ思想はマルクスレーニン主義と同じく、観念論と形而上学のさまざまな潮流に反対し、唯物論的で弁証法的な立場を確固として守り通すなかで生成され発展してきた。

周知のように、マルクスの弁証法的唯物論が勝利するまでは、唯物論と観念論の闘争が哲学の根本問題として争われていた。すなわち、物質が本源的、一次的であるのか、精神が本源的、一次的であるのか、世界は本質において物

質から成り立っているのか、精神から成り立っているのか、という問題である。

ではなぜ、この問題が哲学の根本問題として提起されていたのであろうか。物質が一次的であろうが精神が一次的であろうが、私たち人間の幸福にとって何の関係もないのではないか。この疑問に対しては次のように答えることができる。すなわち、もし観念論が勝利するなら、人間が世界と自己の運命の主人となるか、逆に人間以外の何ものかが世界と人間の運命の主人となるのかという重要な問題において、人間以外の何ものかが世界と人間の運命を決定することになってしまうからである。

また唯物論と観念論の闘いは科学と非科学との闘いであり、もし観念論が勝利するなら科学は否定され、したがって人類の発展も制約されてしまうからである。

それ故このような重要な意義をもつ観念論と唯物論の闘争における唯物論の勝利は、物質発展の最高の産物である人間中心の哲学であるチュチェ思想形成のための不可欠の前提だったのである。科学が教えているように、人間も物質進化の産物であり、最も進化した生命物質である。しかも、人間は他のいっさいの動物とは決定的に異なった性質をもつ動物である。

人間はこの地上で人間としての特質、すなわち世界に主体的・能動的に働きかけ、目的意識的な創造的活動をおこなう社会的存在であるという特質を獲得し始めた瞬間から、他のいっさいの動物と決定的に区別された。つまり自主性と創造性と意識性をもった社会的存在となったのである。しかし人間社会の発展の初期においては自然に対する知識も乏しく、自己が何ものであるかという認識にも欠けており、したがって人間は人間以外の何ものかを怖れ、それに頼って生きようとした。人間が自己をとりまく世界と人間についてどうにか一つの見解をもつようになったのは、

わずか二〜三千年以前のことであり、しかも当初の世界観は呪術的・神話的なものであった。やがて人間は自然を怖れ、自然を崇拝し、いろいろな神に祈りを捧げた。そして人間は人間自身を問題にし、自己の理性に目醒め、種々の宗教的・観念的世界観をもつようになったが、これらはすべて、人間は人間以外の何ものかを、または人間精神の何らかの産物を世界の始源であり、主人であると認めるものであった。このように、人間の自己および世界認識の不十分さから生まれたのが、宗教的世界観やあれこれの観念論にほかならない。観念論者たちは、神、精神、理性などを世界の根源に置いたのである。

宗教的世界観は結局は人間の弱さ、科学的知識の不十分さの反映であり、この地上で実現できない人間の願望を神に托し、来世に求めるものである。また各種の観念論的世界観も、人間の発展過程での、したがってまた人類の思想発展途上の不可避的な産物であった。しかし人類は次第にこのような宗教的・観念論的な世界観の支配から脱出して、自己自身を正しく認識し、自己自身の力に目醒めるようになる。

歴史上さまざまな観念論が人類の思想史上で何らかの役割を果たしたことを無視するわけではないが、しかし宗教や観念論が勤労人民大衆を抑圧する一定の役割を果たしたことも事実である。したがって、勤労人民大衆が人間としての自己に目覚め、自己自身の力で幸福な生を実現するためには、いっさいの観念論のもつ誤りを否定しなければならない。マルクスとエンゲルスが、そしてまたレーニンが、あらゆる種類の観念論や坊主主義と闘い、唯物論に勝利をもたらした功績は、人間が人間以外の何ものにも頼らず、みずからの力でみずからの運命を切り開くための不可欠な前哨戦の勝利だったのである。なぜなら、人間は意識をもった存在ではあるが、やはり発展した物質なのだから、唯物論の勝利は、人間中心のチュチェ思想の勝利への道を切り拓くための不可欠の前提だからである。

しかし、唯物論が正しく観念論は誤っているとはいえいっさいの宗教や観念論が人類の思想史上において何らの役割も果たさなかったことを意味するものではない。そうではなく、実に多くの貴重な遺産が宗教や観念論のなかには含まれている。例えば宗教は人間の願望を集中的に表現している。「神は愛なり」「仏は慈悲なり」という言葉のなかに、神や仏に托した人間の願望が結晶しており、またソクラテス、プラトン、アリストテレスの思想のなかに、人間についての深い洞察が盛られており、ニーチェの反キリスト教的な思想のなかには人間性回復の熱情が脈打っており、ヘーゲルの絶対観念には弁証法が内在しているなど、例をあげれば枚挙にいとまがないであろう。偉大な観念論は素朴な唯物論よりもはるかに貴重なものを含んでいる。しかし、宗教や観念論がどのような貴重なものを含んでいても、それが観念論であること自体は否定されねばならないことである。そして宗教や観念論のいっさいの成果は、唯物論的基礎の上に再生されなければならないのである。

チュチェ思想は、唯物論と観念論との闘争において勝利した唯物論の成果を全面的に継承しているとともに、労働者階級の立場に立ち、ともに共産主義の実現を目ざし、ともに唯物弁証法に依拠しているという点で同一である。ではマルクスとチュチェ思想が継承関係にありながらも持っているところの根本的差異、別言すればチュチェ思想の独創性はどこに求められるのか。

チュチェ思想は何よりもその根本原理が新しく、かつ独創的である。

労働者階級の革命思想の偉大さと独創性は、その根本原理によって決定される。

チュチェ思想の独創性はその根本原理の独創性に由来する。

チュチェ思想の根本原理は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという原理である。すなわちマ

ルクス主義とチュチェ思想の根本的差異は、チュチェの哲学的原理に示されているように、チュチェ思想が徹底した人間中心の哲学だという点にある。

チュチェ思想がマルクス・レーニン主義との関係で継承性をもっているのは、それが上述のようにその理念と哲学的立場において共通性をもっているからである。しかしチュチェ思想がその哲学的原理と世界観の内容において、マルクス・レーニン主義と根本的に区別される独創性をもっている。

マルクス主義が提起した哲学の根本問題は、物質と意識、存在と思惟の関係についての問題であった。そしてマルクス主義は物質の本源性を認め、世界は人間の意識や思惟によって生み出されたものではなく、それ自体が客観的に存在し運動する物質であるとした。

チュチェ思想はこの唯物論を継承したうえで、さらに世界の主人は人間であり、世界を改造する力も人間にあること、言いかえれば世界における人間の地位と役割に関する新しい哲学的原理を明らかにすることによって、今日の物質世界の変化発展が人類の出現によって全く新しい段階に到達したことを明確にし、世界と人間の関係についての科学的解答を与えたのである。

このチュチェの哲学的原理こそは、チュチェ思想のすべての理論の出発の基礎であり、かつチュチェ思想のすべての理論は、この原理によって貫かれているのである。

思想の進歩性は、その思想がどれほど人民の利益に奉仕し、人民の自主的な地位と創造的な役割を守り、人民の幸福と発展の道をどれほど正確にかつ遠くまで見通しているかによってきまる。

人民の生活は絶えず変化し、前進するのだから、人民の要求と利害関係を代表する思想もまた不断に発展しなければ

ばならない。したがって過去の学説をそれがいかに優れていても教条として固定的に受け入れてはならない。

古典を読むことも必要であり、また歴史的に蓄積した思想的・文化的富を継承発展させるために昔の人々が創造した思想・文化を研究するのもよいことである。しかし、一部の人間の中には昔の人々の書いた本に、現代の人々には思いもつかないりっぱなことがあるかのように考え、それを神聖化しようとする傾向がある。

社会は発展し、思想・文化も発展する。昔の人々が独創した思想と文化を大切にし、それを批判的に継承発展させるのは重要であるが、過去の思想と文化を崇拝し現在の成果をないがしろにするのは大きな誤りである。古典の思想と命題が、今日の人間生活の発展に役立つかどうかを基準にしてその価値を評価するのではなく、古典の思想と命題を頭から正しいものときめつけて、それを基準にして今日の人間の生活を評価しようとすることほど愚かなことはない。このような人々は、文化遺産の主人ではなく、その奴隷であるにすぎない。したがって私たちはマルクスの偉大さを認大さを認めるとともに、否その偉大さを認めるが故に、マルクスの理論を教条主義的に理解してはならないのである。

絶対化された不変の思想的命題なるもののために人民が奉仕するのではなく、人民の幸福と発展のために、思想が奉仕すべきであるのは勿論である。

自主的独創的思想の任務は、人間の進むべき道はどの道であり、人間の目的とすべきものは何であるかを解明するところにある。進歩的な思想は、人類発展の要求に即して未来を展望しつつ、人間の本性を充分に生かす真の幸せな生活の明を明示する。

今日反動的支配階級は、勤労人民大衆が、人類の未来について考え、人民の運命について関心をもったりせず、そ

の日その日をただ安楽に暮せばよいのだと、無思想性を無政治性を奨励している。彼らの狙いは、人民大衆が美しい未来の理想と、現実を変革する革命意識を捨て去って、支配階級の政治に盲目的に追従するような人間になることである。従って私たちはこのような狙いに真向から反対して、自らの思想・意識の深化・発展に第一の意識を附与しなければならないのである。そして、このためにも私たちはチュチェ思想がマルクスレーニン主義を継承しながらも、それを独創的に発展させた哲学であることを把握しなければならない。

二、人間の本質について

チュチェ思想は歴史上はじめて人間の本質的属性を解明し、人間中心の哲学を創始した。

もともとマルクス・レーニン主義も人間の解放を目ざし、共産主義の実現を目ざしているのであるから、人間を何よりも大切にする思想であり、マルクスにも人間観は当然存在する。しかし時代的制約もあって、マルクスは人間の本質を正しく、かつ全面的に規定してはおらず、したがって世界における人間の地位と役割の解明を哲学の根本問題として提起し、解明するには至らなかった。

すでにみたように世界と人間の関係をどうみるかは哲学における根本的な問題であり、チュチェ思想はこの問題を人間を中心にして考察した。もちろん過去のマルクス・レーニン主義者も人間が物質進化の産物であるということを認識していた。

周知のように、ヘーゲルやフォイエルバッハの見解を摂取し克服して、マルクスとエンゲルスは一九世紀の四〇年代の前半に労働者階級の哲学であるマルクス主義を創始した。

マルクスの人間観はやはり時代の産物であった。

近代ヨーロッパにおける人間観の形成は、イギリス革命（一六四二〜六〇年のピューリタン革命と一六八八年の名誉革命を総称）と一七八九年のフランス革命という二つの社会革命、および一八世紀末から一九世紀にかけてのイギリスを先頭とする産業革命によって多大な影響を受けた。

イギリスやフランスの革命は人間が社会制度および政治体制そのものを変革できるという可能性を、産業革命は生産力の発展とそれに伴なう人類の創造力を大規模に再編成する可能性を実際に示した。

こうして人間は、自然と社会を積極的に改造しようとする志向と能力をいちだんと強めた。

一八四〇年代のはじめごろからマルクスとエンゲルスによって労働者階級の解放による全人類の解放をめざす新世界観が成立し、社会的存在としての人間観がうちたてられた。

マルクスは資本主義的搾取から賃金労働者階級を解放することによって全人類が解放されるという見解に立ち、資本主義社会という社会制度を打倒しなければならないと、階級闘争の理論を確立した。

そして人間の本質を客観的な社会条件と結びつけて考察し、人間の本質は社会的関係の総体であるという規定を与え、また人間は労働する 動物であるとの 規定も示している。マルクスは 社会の構造の土台としての 経済関係を重視し、社会変革によって資本主義社会を打倒し、新しい社会、社会主義社会、共産主義社会を樹立することによって人間の解放が実現するとみ、賃金奴隷制の打破、階級闘争の旗を高く掲げて「万国の労働者団結せよ」と訴えた。

マルクスはその初期の論文『経済学・哲学草稿』のなかで人間の本質を三つの点で規定している。

まず第一にマルクスは人間を他の生命物質と同様にひとつの自然的存在としてとらえた。つまり人間は自然の一

部であり、自然なしにはその生命を維持することはできない、その点では他の動物とまったく同じである。しかし第二にマルクスはたんに自然的存在であるばかりでなく、人間的な自然的存在であると規定した。第一の自然的存在としての人間把握が人間と自然との同一性を表現しているとすれば、第二の人間的な自然的存在としての人間把握は人間の自然にたいする本質的な差異性を表現している。

人間的な自然的存在というマルクスの規定は、人間は労働する動物であるということを前提としている。なぜなら人間は自然に働きかけ、自然を人間的自然に転化させることにより、自分自身を自然的存在としての次元から人間的な自然的存在へと転換させることができたからである。また、人間が自然に働きかけるという行為は個人としての人間の営みではなく、必然的に社会的集団的人間の営みとなる。

それゆえに、人間は他の人間と関係を取り結ぶなかでのみ、つまり社会関係を通してのみ、人間的自然として存在することができる。ここから人間は社会的存在であるという人間についての第三のマルクスの規定が生まれてくる。

マルクスは人間の第三の規定である社会的存在としての人間の行為を主に労働としてとらえただけでなく、資本主義社会ではいっさいの労働生産物が商品化され、人間的労働の生産物が一部の者によって個人的、排他的、私的に所有されること、その結果人間は真に人間として生きることができなくなるので、資本主義社会を打倒して資本主義的所有を基礎とする階級的搾取を廃絶した社会主義、共産主義社会を建設することによってのみ人間解放は実現すると述べた。そして社会主義、共産主義社会が人間の理想社会であることを明らかにし、社会的存在としての人間は共産主義社会を実現してこそ真に人間として生きることができるとしたのである。社会的存在である人間は社会的、共同的生き方によってのみ人間らしく生きることができるという人間観は、マルクスが一貫して持ちつづけた思想であ

る。

マルクスは、宗教的および観念論的な人間観を否定し、人間は労働する動物であることおよび人間の本質は社会的諸関係の総体であるということに、他の動物とは決定的に異なる人間の本質を認めた。これは人間の本質にたいする科学的見解であり、それ以前の人間の本質的規定にくらべて決定的に正しい規定である。

マルクスは、人間は生活資料を生産しはじめたときから自己を動物から区別しはじめたとし、労働は人間固有の営みであり、人間以外に、労働する動物は存在しないということを明らかにした。

しかし、人間は自然に働きかけて労働することを基本としながら、社会を改造するうえでも、また精神生活や文化面で人間自身を教育改造するうえでも創造的能力をしだいに向上させ発展させた。

それ故、人間をたんに労働する動物であると規定するより、自主性と創造性、意識性をもつ社会的存在であると規定することの方が人間の本質的規定としては、さらに全面的で科学的な規定である。

マルクスはまた人間を社会的諸関係の総体であると規定しているが、これは人間が社会的関係を結び、社会の変化とともにその性質を変化発展させるということを意味するものであり、人間の本質を観念的、宗教的にとらえていた以前の規定の誤りや不十分さを克服するものであった。しかし、マルクスのこの規定も人間の本質規定としては不十分なものである。

たしかに、マルクスは人間の解放、疎外された人間性の回復を重要な問題とみた。しかし、マルクスは結局、資本主義の没落と社会主義の勝利の必然性を科学的に論証することに力をそそぎ、階級闘争の理論を強調し、人間生活のなかで決定的な意味をもつものとして物質的生産と経済関係を重視したが、客観的法則にもとづいて変化発展する世

界のなかで人間が占める地位と役割の問題を、哲学の根本問題としてとりあげることはしなかったのである。

これにたいしてこれまでみたように弁証法的唯物論が到達した普遍的真理を前提にして、哲学の根本問題を新しく提起し、社会的存在である人間の本質的特性を明らかにし、完成した世界観を確立したのはほかならぬチュチェ思想である。

人間に関する問題は、従来の哲学でもしばしば論議の対象とされてきたが、そのほとんどは社会的関係を離れた純然たる人間にたいする抽象的な見見解にとどまっていた。人間の本質に関する問題は、マルクス主義によって社会関係のなかで提起され解明された。

チュチェ思想は、人間を社会的関係のなかで考察するだけではなく、その本質的特徴を新たに解明した。

チュチェ思想はまず世界の一般的特徴に関する弁証法的唯物論の真理を認める。しかし、チュチェ思想は唯物論の正しさを確認したにとどまらず、さらに唯物論を深化・発展させて世界に対し能動的に働きかけ、世界を改造する主要な物質が何であり、世界を改造する力はどこにあるのかという問題を哲学の根本問題として歴史上はじめて新たに提起し、これに解答を与えた。

世界が物質から成り立ち、絶えず弁証法的に変化・発展しているという物質世界の一般的な理解だけにとどまるなら、人間と世界に対する理解としては不十分である。こうした見解は、世界を形成するすべての物質的存在のもっとも一般的な特徴を解明したにすぎない。

世界の本源的特徴を明らかにし、世界に対する正しい見解を確立するためには、世界に存在する物質を、その共通性においてばかりでなく、相違性の見地からも考察し、現代におけるもっとも発達した物質はほかならぬ人間である

ことを明らかにし、この人間の本質を正しく解明することによって、世界における人間の地位と役割を正しく規定し、人間は世界に対してどのような立場をとり、どのように世界を変革すべきかを明らかにしなければならない。チュチェ思想はまさにこの点を解明したのである。すなわち、チュチェ哲学が新しく解明した世界に対処する人間の立場とは、世界の主人である人間を最優先する立場からすべてを考察し、世界の改造者である人間の活動を基本とし、すべての変化発展に臨む立場である。

金正日書記は「チュチェ思想について」のなかで次のように述べている。

「世界が物質からなり、物質の運動によって変化発展することはすでに明らかにされました。チュチェ思想は自然と社会を支配する主人は誰であり、それを改造する力はどこにあるかという問題に解答を与えることによって、世界にたいする見解を明らかにしました。世界が人間によって支配され改造されるというのは、人間との関係において明らかにした世界にたいする新しい見解であります」

また書記は「チュチェの理解で提起される若干の問題について」で次のように指摘している。

「チュチェ哲学は人間を中心に展開され体系化された人間本位の哲学であります」

つまり、チュチェ哲学が人間中心の哲学だというのは、チュチェ思想が世界についての見解、世界に対処する立場を人間を中心に据えて明らかにした哲学だからである。ではなぜ人間を中心としなければならないのか。

哲学は人間がいかに生きるべきかを問題にする科学である以上、人間中心であるのは当然であるが、しかしこの点からだけでは人間を中心とするのはなぜかの解答にはならない。哲学が人間中心でなければならない理由は、これまでにも繰返し述べたように、人間が物質世界における最も発達した存在であり、他のあらゆる物質、無生命物質は

もちろん、生命物質のなかでも群をぬいた存在であり、物質世界の革命的発展の産物だからであり、今日、世界において自然を改造し、社会を変革し、自己自身を改造することのできる存在は人間のみだからである。

人類の誕生により、それまで、物質世界の自然発生的な発展は、今やとるに足りないものになりつつある。それほど人類の誕生によりひき起こされた物質世界の変化発展はめざましいものがある。他の生物はその生物が発展することのできる客観的条件のあるところでのみ発展するが、人類は自己の発展に必要な諸条件を自らでつくり出しながら発展する。これは物質発展の根本的変化であり革命である。このような人間の発生によって物質世界の発展の性格も根本的に変化した。今日、世界の発展を説明する場合、人間が世界で決定的な地位と役割をもつことを基本にしてこの問題を取り扱わなければならない。

とはいえ現在、人間が世界で占める地位も役割もまだまだ低い。物質世界の発展は永遠の問題である。したがって人類の発展もまた永遠の問題である。しかし、将来、人間の自主性と創造性は想像を絶するほど高まるであろうことに疑問の余地はない。

金日成主席は、このような世界における人間の地位と役割の問題をチュチェの哲学的原理、すなわち「人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定する」として示したのである。人類の思想史上に初めて提示されたチュチェのこの哲学的原理の確立は、人間を限りなく勇気づけ、人間に限りない希望を与え、人間の価値を無限に高めるところの人類の思想史上における一大画期であった。

チュチェ思想が人間中心の哲学であり、人間中心の弁証法的唯物論であるということことができるのは、まさに、それが世界における人間の地位と役割の問題を解明したからである。

金正日書記はつぎのように述べている。

「チュチェ哲学は、人間にたいする見解を新たに解明しました。

歴史的にみて、人間の問題は久しい以前から哲学の研究対象として際限なく論議されてきましたが、完成した哲学的な解明はなされませんでした。マルクス主義の創始者たちは、人間の問題にたいする唯物弁証法的見解の確立によって、人間にたいする哲学的解明に大きな前進をもたらしました。かれらは、人間の本質を社会的諸関係の総体と定義づけ、人間の活動において物質的生産と社会・経済関係に決定的な意義をみいだしました。かれらは人間の問題にたいする唯物弁証法的見解を確立しましたが、自然と社会の支配者、改造者としての人間の本質的特徴については、全面的に解明することができませんでした。

チュチェ哲学ははじめて、自主性と創造性、意識性が、社会的存在である人間の本質的特徴をなすことを明らかにして、人間にたいする完璧な解明をあたえ、自然と社会を支配し改造する主人としての人間の地位と役割に関する正しい哲学的解明をおこないました」（論文『チュチェ哲学の理解で提起される若干の問題について』）

人間は自主性と創造性と意識性をもつ社会的存在であり、この三つの属性を兼ねそなえてこそ、真の意味での人間であることを明らかにしたところに、チュチェ思想の真髄があり、マルクス・レーニン主義に対する独創性がある。

もちろん、前述のように、マルクス主義が人間を欠落させた思想でないばかりでなく、マルクス主義は人間解放のための思想であり、全世界のプロレタリアートの団結を訴え、人類の理想社会の実現のために世界の変革を目指す思想である。しかしマルクスの思想は、その巨大な歴史的功績にもかかわらず、今日からみれば、時代の制約もあって、プロレタリアート解放の思想ではあったが、まだ徹底した人間（人民大衆）中心の思想として体系化されるとい

う域までには到達していなかったのである。

三、革命理論について

社会歴史観におけるチュチェ思想とマルクス・レーニン主義との相違は、チュチェ思想の革命理論とマルクス・レーニン主義の革命理論との相互関係において、さらに明確となる。チュチェの革命理論も、マルクス・レーニン主義と同様にブルジョア理論と日和見主義理論との闘争のなかから生まれたのであり、マルクス・レーニン主義理論の真髄を擁護し、それを時代の革命実践の要求に即して創造的に適用し発展させる過程で新たに創始され、豊富化された理論である。

マルクス・レーニン主義の革命理論は、唯物弁証法に基づいて展開された革命理論であり、チュチェの革命理論は、革命闘争における人民大衆の地位と役割に関する根本原理に基づいて展開された勤労人民大衆中心の革命理論である。

マルクス・レーニン主義の革命理論は、社会の発展過程を生産様式の発展過程とみなしたところから、革命の本質を古い生産様式の新しい生産様式への交代過程とみなした。マルクスは、生産力が絶えず発展して、古い生産関係が生産力の発展を抑制する桎梏になると、新しい生産力がそれに照応する新しい生産関係を要求する、とみなした。このことから革命の原因を生産力と生産関係の矛盾に求め、革命は生産力と生産関係の矛盾を解決するための闘争であるとみ、古い資本主義制度を転覆して、社会主義制度を樹立することによって革命は終わるとみた。

これに対しチュチェの革命理論は、革命を人民大衆の自主性をめざす闘争とみる。

言いかえれば、革命は本質において、勤労人民大衆が自然と社会のあらゆる従属と束縛から抜け出して自主的に生きようとする要求を実現するための闘争、自主的で創造的な生活を享受するための闘争である、とみる。勤労人民大衆が社会においてどれほど自主的な生活を享受することができるかというのは、彼らが社会においていかなる地位を占め、いかなる役割を果たすかによって決定される。それゆえ人民大衆の自主性をめざす革命理論は、社会における彼らの地位と役割を根本的に変える社会的変革である。

革命の本質に関するチュチェ思想とマルクス・レーニン主義の見解の相違は、当然革命の原因と原動力に対する理解においてもみられる。

マルクス・レーニン主義の革命理論では、革命の原因と原動力を生産力と生産関係の矛盾の発展に求めるが、チュチェの革命理論はそれを人民大衆自体の自主的な要求の高さと創造力に求める。

マルクス・レーニン主義では、生産力の発展水準が革命勝利の決定的要因とみなされている。しかし生産力の発展は新しい社会の建設の物質的基礎をもたらすため、革命勝利の重要な客観的条件ではあるが、生産力がいくら発展したとしても、人民大衆がめざめず、かつ政治的勢力が準備されていなければ、革命は起こらず、よしんば起こったとしても、その究極の勝利は不可能である。

また人民大衆が革命を起こす目的も、生産力を合理的に使うこと自体にあるのではなく、人民大衆も階級的及び民族的隷属から解放することにある。

それ故チュチェの革命理論は、革命の原因があらゆる従属と束縛から脱して自主的に生きようとする人民大衆の志向と要求にあるとみるのである。

したがって生産様式の交代のみを革命とみるのではなく、自然の束縛と古い思想と文化の束縛から抜け出すための闘争も革命とみなし、人民大衆の自主性を完全に実現するときまで、革命は継続するとみるのである。

チュチェの革命理論はまた人民大衆を革命の基本原動力、決定的勢力とみるところから、革命勝利の決定的な原因を、生産力の発展水準に求めるのではなく、主体的要因である人民大衆の思想・意識水準と政治的勢力の準備程度のいかんにあるとみる。

革命勝利の決定的要因は、生産力の発展によるものではなく、革命の主人である人民大衆が革命を要求するか否か、反革命勢力を破砕して革命勝利を保障することのできる革命的勢力が準備されているか否かによって決まる。

チュチェの革命理論は、その包括範囲においてもマルクス・レーニン主義の革命理論と区別される。

金正日書記は次のように述べている。

「主席はチュチェ思想にもとづいて、現代の民族解放、階級解放、人間解放の理論と戦略戦術を深く解明しました」（「金日成主義の独創性を正しく認識するために」）

マルクス・レーニン主義の革命理論は、プロレタリア革命の準備期と遂行期の革命実践から提起された問題を解決するのを基本命題として出現した。

ここからマルクス・レーニン主義の革命理論は、資本主義、帝国主義を転覆し、社会主義制度を樹立するための理論を主な内容としており、それも主にヨーロッパの発展した資本主義諸国での労働者階級の解放闘争の問題に主眼がおかれた。

チュチェ思想は、労働者階級と広範な人民大衆の革命闘争が世界的規模で幅広く多様に繰り広げられる新しい歴史

的時代の実践的要求を反映して出現した。
ここからチュチェの革命理論は、労働者階級の階級解放の理論と、戦略・戦術ばかりでなく、現代が提起する反帝反封建民主主義革命と社会主義革命、社会主義・共産主義建設など、民族解放、階級解放、人間解放を実現するための全歴史的過程の理論と戦略・戦術をすべて包括している。
唯物史観とそれに基づく社会発展の法則は、それ自体は理論的にも実践的にも正しいものであり、労働者階級の解放に役立つ武器であった。しかし、この理論のみで人類の発展のすべてを説明することはできない。
たとえば人類の歴史を階級闘争の歴史とみる見解は、人類の悠久な歴史の一駒である階級社会において適用される規定である。したがって、エンゲルスが指摘したように、原始共同体社会においては妥当しないだけでなく、社会主義の完全勝利の後の社会においても無意味となる。それだけでなく階級社会においても、階級闘争の理論によって社会の発展過程を説明するのではなく、社会的・政治的自主性を実現しようとする人民大衆の闘争が階級闘争という形態をとって貫徹されているものと理解すべきなのである。
さらに今日の世界の現状をみるとき、民族の解放と独立、第三世界・非同盟諸国の団結、帝国主義打倒の問題、国際共産主義の団結と支配主義排除の問題等々は、いずれも世界的・国際的規模で展開されている自主性擁護の問題に帰着し、包括されるのである。
このように階級闘争の理論のみによっては現時代の課題である「全世界の自主化」を実現することはできないのであって、自主性を擁護し貫徹するという観点を離れては、人類の当面する問題に解答を与えることはできないのである。

チュチェ思想はさらに共産主義実現のための新しい理論を具体的に創造した。すなわち人民政権プラス三大革命イコール共産主義社会の実現というテーゼがこれである。このようにチュチェ思想は人間解放を完全に実現する方途を明らかにし、広範な大衆を組織動員して革命と建設を勝利に導き、共産主義社会を実現する方途を示したのである。

以上のように、チュチェ思想は新しい時代の要請を反映して人民大衆中心の革命理論と戦略・戦術を創造的にうち出したのである。

マルクス・レーニン主義は、当時の労働者階級の革命闘争の要求を反映した思想として、当然その制約性をもたざるをえない。

マルクス・レーニン主義の制約は、その時代的条件と当時の歴史的任務、そしてその起点としてとらえた歴史的前提と関連している。

マルクス・レーニン主義の命題と理論が、今日の革命実践の要求するすべての問題には解答を与えることができなかったからといって、もちろんそれを否定するのは誤りである。

私たちはマルクス・レーニン主義を正しく継承し、その業績を十分に理解したうえで、チュチェ思想の独創性と偉大さを正しく認識しなければならない。

四、意識論・認識論について

チュチェ思想が徹底した人間中心の哲学であるということは、意識論および認識論の分野におけるマルクス主義との対比においても明確にみることができる。

マルクスの唯物論は、物質の本質を意識との関係において規定し、意識の本質を物質との関係において規定しようとした。ここから意識は物質世界の反映であるという定義が生まれた。

観念論は、意識を世界の構成原理にまで高め、世界を生み出す根源とみた。これに対し唯物論は、意識は脳髄という物質によってつくり出された外的世界の模像であるとみた。この点で唯物論は正しい。

たしかに意識そのものは物質ではなく、物質のもつ属性である。意識という物質があるのではなく、意識作用をする物質が存在するのである。観念論者は、人間の行動を規制する意識の役割を過大に評価する余り、人間という最も発達した物質の属性である意識を、物質と同じように客観的に実在するものとみる誤りを犯した。

属性はあくまでも物質に属する物質だから、母体である物質を離れては作用することはできない。

意識は物質ではなく物質の属性であるから、それがどのような存在であるかという角度からその本質を規定するのではなく、その属性がどのような作用をし、どのような機能を遂行するかという視点からその本質を規定すべきである。

意識が客観的存在を反映する機能を果し、意識に反映された映像が客観的存在そのものではなく、その反映であるという主張はそのこと自体としては正しい。しかし意識が客観的存在の反映だという規定は、意識が客観的存在であるかどうかという角度から、つまり意識の本質を存在論的見地から規定したものである。

意識は、最も発達した物質である人間の属性であり、しかもそれは人間の主体的属性である。したがって意識の発生発展は人間の生命を抜きにしては考えられないのであり、意識の本質は必ず社会的存在としての人間の本質、すなわち自主性と創造性との関係において究明されなければならない。

ところで意識とともに認識という範疇があるが、マルクス主義の見解によれば、認識とは意識作用の一部である。認識とは、対象すなわち客観的実在の模写する脳髄の働きであり、人間の意識における客観的実在の反映である。とはいえ、マルクスは、実践から遊離した認識のための認識を否定している。マルクスはこのことをフォイエルバッハについてのテーゼにおいて強調している。この点でマルクス主義の認識論は実践のための認識論である。しかしそもそも認識とは何かということの理解において、マルクスは認識を客観世界の反映であるとみていたのであるから、だがこれだけでは認識の本質について解明したとはいえない。そもそも認識を含めて意識はどのようにして形成されるのか。脳髄それ自体が意識を生みだすのではなく、前述のように人間の社会的生活の中において、脳髄は意識をもつことができるようになるのである。そのことは既述の狼少女の例によっても明らかである。

人間と類人猿が分かれたのは数百万年以前であるから、ヒトニザルを社会の中で生活させても、ヒトニザルは人間になることはできない。それは類人猿は人間のように意識をもつことのできる進化した生物的基礎がないからである。だが逆に、生物的基礎があっても狼少女の例でわかるように、社会生活を長く経験しない場合は人間になることもできないのである。

このように意識とはあくまでも人間固有の属性である。

ではマルクス・レーニン主義は、意識の本質をどのようにみたであろうか。

マルクス・レーニン主義は、意識とは人間の頭脳による世界の反映であり、模像であるとみる。そして意識の問題を主として客観世界との関係における認識の問題として考察した。確かに意識の本減は客観的世界であり、したがって意識が客観世界の反映であり模写であるということは正しい。意識は何よりもまず人間の脳髄と客観世界との関係

で生まれる。だが、意識の役割はそれだけではない。意識は客観的存在によって規定されると同時に人間の自主的創造的な要求にもとづく客観世界の反映である。人間はその認識したものを自主的創造的要求にもとづき整理分類し発展させる。そして、事物の認識とその結果得られた知識にもとづき、世界を人間のために改造し変革するのである。人間は、現在のことだけでなく将来のことについても意識的に計画をたて、その実行手段を考える。この点からしても、意識を反映的模写論の段階だけで問題とすることの不十分さがわかろう。

そもそも社会的意識は、社会的存在である生産関係の総体によって規定され、社会の上部構造は下部構造によって規定されるという見解は、正しい面をもちながらもきわめて不十分な見解である。社会的意識には単に経済的関係である生産関係だけが反映するのではなく、政治制度をはじめ、社会制度、社会生活全般が反映されるのであり、そのうえ、自然をも反映する。しかもこれら一切の反映は単なる反映でなく、人間がその要求に即して自然と社会を改造するに必要な知識を含むのである。したがっての経済的土台である生産関係の総体を反映する社会的意識は、広範な意識の一部分にしかすぎない。この点からみても、生産関係の変化発展が社会的意識の変化発展を全面的に規定するかのような理解は、正しいものではない。

人民大衆が古い社会制度を打倒しなければならないという思想意識をもち、このための政治的力量を準備し、新しい政権をうちたて、その力によって新しい経済制度をはじめとする新しい社会制度を自立する過程を、下部構造によって規定された上部構造が再び下部構造に反作用するものとみる見解は、きわめて一面的な無理な理解といわなければならない。

もともと思想意識や上部構造である政権そのものが生産関係に反作用するというのは、新しい思想や政権の所有者

である人間が、その要求に即して古い経済制度を破壊し、新しい経済制度を確立するために作用するということなのである。

そのように意識は、人間の要求にもとづき何が人間にとって利益であり、何が価値あるものかを認識し、自然改造と社会改造のための原動力となる働きをする人間の属性である。意識はさらに現実を認識するだけでなく、現実認識を基礎として将来の要求と利害関係を展望し、人類の理想社会がいかなるものでなければならないかまでも予見する働きをするのである。

このような意識の問題を単に物質との関係において規定するに止まる誤りを克服し、人間の主体的属性との関係で把握するところにチュチェの意識論の独創性を私たちはみることができる。

ところで意識と認識との関係であるが、認識とは、頭脳が客観世界を把握するという意識の一つの機能である。人間の意識の領域は、自然と社会人間自身のあらゆる領域にわたっており、また過去、現在、未来のすべてにもおよんでおり、その内容も複雑多岐にわたっている。この意識の第一の役割が認識である。意識は人間と自然との接点である認識から始まる。そこで次に認識論についてのマルクス・レーニン主義とチュチェ思想の関連についてみよう。

マルクス主義の認識論は反映的模写論である。そして人間の認識の正否は、実験、実践によって検証され、認識、実践、さらに認識、実践の繰り返しによって人間の認識は、相対的真理から、絶対的真理へとすすむものとみる。

カントは、人間は事物を認識するにあたり、先天的な認識の形式をもっており、これにあてはめて事物を認識するのだから、人間は「もの自体」を認識できないとして、かれのいわゆる「不可知論」を展開したが、これとは反対に、マルクス・レーニン主義の認識論は、物質世界は認識可能であり、人間の認識は、科学とその応用、実験、実践

によってその正しさは検証できるものと主張した。

マルクス主義によれば、物質的世界は人間の意識（心、精神、観念）の外に人間の意識から独立して存在するものであり、人間の認識は客観的に存在する物質世界のもつ法則の人間の頭脳への反映である。そしてレーニンはこのようなマルクス主義の認識論を「反映的模写論」とよんだ。しかし同時にレーニンは、人間は客観世界を無条件に直接鏡に映すように認識できるものではないとして、人間が客観世界を反映し、模写する場合の形式について、次のように述べていた。

「認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な、直接的に、全一的な反映ではなく、一連の抽象の過程であり、諸概念、諸法則など（思惟、科学＝〝論理的理念〟）の定式化、形成の過程であり、そしてこれらの概念、法則など論的理理念こそは永久に運動して発展している自然の普遍的な合法則性を条件的、近似的に把握するものである。ここには実際に客観的に三つの項がある。(1)自然、(2)人間の認識＝人間の脳髄（同じ自然の最高の産物としての）および(3)人間の認識における自然の反映の形式である、この形式がもろもろの概念、法則、カテゴリーなどである。人間は、自然を全体として完全に、すなわち自然の〝直接的な総体性〟を把握する＝反映する＝模写することはできない。人間は抽象、概急、科学的世界像、等々をつくりながら、永久にそれに接近していくことができるだけである」（『哲学ノート』、岩波文庫(1)一六〇ページ、『レーニン全集』第三八巻一五二―三ページ）

すなわち、人間の認識は客観世界の法則への無限の接近過程として理解さるべきであり。人間の認識は実践的な感性的活動から出発して、その本質的把握に達するのである。人間は最初その感覚によりあらゆる事物の間の外部的つながりだけを見るにすぎない。毛沢東はこの段階を「認識の感性的段階、つまり感覚と印象の段階」（『実践論・矛盾論』

国民文庫、一二～三ページ）とよんでいる。人間はこのような感性的認識を幾度となく繰り返すが、その量的繰り返しの継続が一定の点に達するや、ひとつの突然の変化を起こし、「概念」を生み出す。人間は感覚する諸現象のなかで、偶然的な本質的でない要素を捨象し、諸現象の本質的な基本的な決定的な連関を反映する概念、さらに概念のなかでより一層基本的な論理的概急である範疇をもつようになり、客観世界の合法則性の認識に到達する。こうして、人間の認識は感性的認識より始まり、毛沢東のいわゆる理性的認識＝論理的認識の段階に到達する。

「認識の真の任務は感覚を通じて思惟に到達し、次第に客観的な事物の内部的な諸矛盾の理解、その法則性の理解、一つの過程と他の過程との間における内部的なつながりの理解に到達すること、つまり論理的認識に到達することである」（同上一四ページ）

マルクス主義の認識論は、このようにして到達された人間の認識が正しいか否かは実践によって検証できるのであり、認識→実践→認識→実践の繰返しにより、人間は相対的真理から絶対的真理へと無限に接近することができる、とみるのである。

出隆教授や古在由重教授をはじめとする日本の進歩的哲学者たちの編集した『哲学用語辞典』（青木文庫、一九五一年初版）も、意識について次のように述べている。

「唯物論によれば、意識とは脳髄という一定の仕方で組織せられた物質によってつくりだされた外的世界の模像。それがおなじ外的世界の模像である感覚と区別されるのは、感覚が外的世界と意識との直接的な結合であり、そとからの刺激のエネルギーが意識されたものに転化することであり、したがって人間による世界認識の最初の段階であるにすぎないのにたいして、意識は感覚から出発した世界認識のより高い・より深刻な段階であり、脳髄の活動のより

高度の・より複雑な過程である。人間は自己の脳髄における模像が正しく外的世界を反映しているかどうかを実践、すなわち、実験と産業によって検証しつつ、一歩一歩と客観的真理に接近してゆく。意識は固定した・静止したものとして理解さるべきではなく、反対に、外的なエネルギーによって与えられた無限に多様な感覚を概念・範疇、法則等に仕上げつつ、より深刻に外的世界を反映してゆく生々した過程として理解さるべきである」。そしてこのような脳髄の活動は「実践と技術による検証によってはじめて正しい方向に進められることができる。また、脳髄の活動の所産である意識は、たんに外的世界を反映するばかりでなく、それを変革せんとする意志を生みだす。外的世界を精確に反映した意識内容とそれを変革せんとする意志とを統一し・体系づけたものが革命的理論である」（九一〇ページ）

ここでは意識は単に外的世界を反映するばかりでなくそれを変革しようとする意志を生みだすとの指摘がなされている。しかしなぜ意識が世界を変革しようとする意志を生み出すかについての積極的な説明はなされていない。では、マルクス・レーニン主義の認識論である反映的模写論それ自体と世界を変革しようとする意志との関係は、どのように説明されなければならないであろうか。

意識が客観世界と人間の脳髄の関係から生まれるのは事実である。周囲世界の他の事物の作用をうける点では、人間も動物と変わるところがないが、しかし、人間は外界に対して自主的、創造的、意識的に対応する点で他の動物と根本的にことなるのである。

したがって社会的存在である人間の意識についての理解を深めるためには、意識と客観世界との関係の解明にとどまらず、意識を人間の本質との関係からみなくてはならない。

チュチェ思想は、マルクス主義の認識論を否定しないばかりでなく、その正しさを認め、これを継承する。しかも

単なる継承ではなく、それを発展的に継承する。すなわち人間の認識は外的世界の反映ではあるが、それは単なる反映ではなく、主体的・目的意識的反映であるとみる。人間の認識は主体的であり、単なる反映的・模写的認識ではない。広い意味での認識は動物一般にも認められる。空中を飛ぶワシは地上の小動物を見逃さない。それは動物の生きるための、本能的認識である。しかしこの動物の認識ですら単なる反映的模写ではない。認識には必ず認識主体がある。ワシは地上の美しい花や高価な彫刻などには見向きもしない。ワシが認識するのは小動物である。このことから動物ですら本能的にではあるが主体的に認識していることがわかる。ましてや人間の認識が単なる反映的模写でないことはいうまでもない。

もともと事物の認識における主体と客体とは相互に対立していると同時に統一しており、両者を絶対的に対立の面だけでみるのは誤りである。このことは、どのような自然科学的観察の場合について考えてみても明らかである。自然科学的観察においても、ある場合は顕微鏡や望遠鏡、ある場合は赤外線感光フィルム、ある場合は特定の波長の光の測定装置を使う。このように観測の主体である人間は対象および観測目的量に応じて、客体との一定の特殊な相互作用をする物体を用いて観測を行なう。すなわち観測の主体は対象との一定の関係を内容とするものである。

一般に認識された事物、すなわち客体が客観性をもっているという場合には二つの側面がある。一つは主体による反映の源泉と対象が主体から独立して存在する客観的世界であるということであり、もう一つは認識の結果が主体主観に依存しないということである。しかし後者の点については、そのままでは古典物理学的・素朴実在論的理解であって、無条件に正しいとはいえない。すなわち普通の条件下で物体を扱っている場合にはそれでもよいが、しかし、ある脱敏な観測器械で量子状態の原子の詳細を見ようとすると、必然的に大きなエネルギーを観測器械が原子に注ぎ

込むことになる。つまり観測主体が客体に作用するのである。

原子のこのような現象は、古典的な巨視的物理学では理解できない面であった。それゆえ原子の認識結果は、巨視的物理学の世界でのように、観測の過程から分離したものではありえない。

量子力学における観測の理論については、さらに困難な問題がある。すなわち、量子力学的な観測過程そのものが観測対象を変えさせてしまうので、量子的世界の物質の客観的姿を果して理解できるかという問題である。ハイゼンベルグの有名な「不確定原理の問題」がこれである。

量子状態では、電子は古い概急の粒子でもなければ波でもない。量子状態は、電子が低エネルギーの条件に合致するように、単独で置かれたときみせる形式である。量子状態が高エネルギーの光で破壊された後に、電子の見出される点がどこであるかを正確に予測することはできない。たとえば原子の速度と位置を、同時に、完全に、正確に決めることができない。もしできたとしたら、電子は粒子として認められ、彼としては認められないことになる。ハイゼンベルグの不確定性原理は、どんな実験によっても、電子は粒子であるか波動であるかを十分に正確に決定できないことを述べている。その理由は、電子が一個の物体で、波の性質と粒子の性質を同時にもっているからである。

粒子の位置と運動量をともに無制限の精度で測定することはできないというのが、不確定原理である。しかし、このようなことがあっても、電子の量子状態は客観的な法則であり、このことには何らの神秘性も疑問もない。

いずれにしても、観測装置としての認識の主体と客体には極めて重要な関係がある。ましてや認識主体が人間である場合の認識が反映的模写論で説明できるものではありえない。

人間は肉体的生命と社会的・政治的生命をもっている。肉体的生命としての人間は、自己の外部にある自然対象を

肉体的生命を維持するために獲得しなければならない。この場合、人間は他の動物のようにただ本能的に認識するだけではない。人間は外的自然を目的意識的に認識する。すなわち目的をもって自然に能動的に働きかけるために認識する。ここに人間の外的自然に対する認識の他の動物の本能的認識との差がある。人間は外的自然を自己の生存のために利用し獲得する場合に、外的自然を目的意識的に認識するのである。さらに人間はその精神的欲望を満たすためには外部の対象を精神活動の対象とし、精神的に認識し、それを自己のものとする。

人間が生きるためには物質的・文化的富が必要であるように、人間の認識には物質的なもの及び文化的なものの認識がある。この生きるための人間と外的自然との精神的関係が人間の認識である。動物の認識は本能的認識である。しかし人間の認識が他の動物と異なるのは、社会的存在として自主的、創造的に生きるために、自己の外部にある自然対象を意識的に認識する点である。つまり人間の認識は自主的・創造的認識である。

人間は外的世界の認識にあたって、「これは重要であるが、あれは重要でない」という価値判断をおこなう。重要でないというのは人間にとって価値の少ないものであり、重要であるというのは人間にとって価値の大きなものである。価値（性）があるかないかの判断は科学性と必然的に結合している。科学性なくしては価値性なく、また価値性のない科学性は人間にとって無用である。

次のような誤りも認識が主体的認識であることを忘れることから生まれる。すなわち、社会科学には階級性があるが、自然科学には階級性がないという、自然科学の本質的非階級性論の誤りがこれである。自然科学の内容そのものには階級性はなく、真理はもっぱら対象のなかにのみあり、認識主体はそれを鏡のように反映すればよい、という主張は、まさに認識主体の主体性が何ら考慮されていないことから生ずる誤った見解である。

マルクスは『資本論』で商品に内在する価値と使用価値の矛盾の展開として貨幣の必然性を解明し、また『資本論』全巻で意識的にヘーゲルの弁証法を適用して、資本主義社会という発展した自然、第二の自然に内在する弁証法を科学的に解明した。マルクスの『資本論』は弁証法の教科書であるといわれる所以である。またエンゲルスも『自然弁証法』と『反デューリング論』などで世界の弁証法的性格を明らかにし、弁証法を反映論の立場から説明した。これはヘーゲルの概念の弁証法を客観世界の弁証法の反映にすぎないとして、ヘーゲルの弁証法を文字通りひっくり返したものである。

だがマルクスもエンゲルスも、弁証法が人間との関係で、つまり認識は人間の目的意識的な精神的労働であることを把握する点では欠けていた。このため、既述のように、生産力と生産関係、土台と上部構造という理解においても、人間（人民大衆）の主体的役割を強調せず、その後の誤った俗流的見解への途を開くことになったのである。

反映的模写論プラス実践論としての認識論は、次のような事情によりその権威を定着させた。すなわち、自然科学が近世以降ますます広く深く自然についての確実な知識を私たちに提供し、自然科学のなかに弁証法の例証が次々に見出され、こうして自然科学の成果による例証主義が権威をもつことになり、人間は自然の弁証法を認識し、発展した科学によってそれが証明される、という考え方である。しかし反映論は反映する主体（人間）を欠落させた認識論である。認識とはあくまでも認識主体（人間）の精神的労働である。すなわち目認識の問題を展開できなかったのである。すなわち、意識とはあくまでも人間の生命活動であり、精神労働である、という点から出発して意識と認識の問題を解明するに到らなかったのである。目的意識的認識は生命をもった生きた人間のみがもつものであり、認識の器官である脳髄は独立的な器官ではなく、人間という肉体がもっている一つの特殊な器官なのである。

問題は認識がどのような機能を果たすのかということにある。

マルクス主義は主に認識は客観世界を反映する機能を果たすものだとみた。

しかし意識は何よりも人間自体の要求を反映し、それにふさわしく客観世界を反映しながら認識するのであり、そして人間の意識は反映された認識の成果を自己の要求と利害関係に即して分析・総合して行動の目標を立て、行動方法を規定し、人間が自主的に創造的に活躍するように調節・統制する機能を果たすのである。

それ故チュチェの意識論、認識論はマルクス主義の認識論の成果を継承しながら、それを人間中心の目的意識的認識論、つまり主体的意識論、認識論へと発展させたものである。

五、思想構成とその内容について

マルクス主義は、ドイツの哲学、イギリスの経済学、そしてフランスの社会主義思想を三つの源泉としており、弁証法的唯物論と、その歴史への適用である史的唯物論、および共産主義のための革命理論などをその主要な構成部分にしている。

レーニンは帝国主義段階の新たな環境に照応してマルクス主義を発展させ、世界で最初の社会主義国を成立させたが、原理的な面においても、構成の面においても、マルクス主義に付け加えたものも省いたものもなく、マルクス主義の枠内で展開されていた。

周知のようにマルクス主義は、自由競争段階の産業資本主義が確立し、資本主義社会の矛盾が全面的に露骨に表面化し、資本の抑圧から自己を解放しようとする労働者階級の闘争が高まった時期に、資本主義を葬り、社会主義を樹

立する歴史的使命を担って登場した労働者階級に、資本主義の没落と社会主義の必然性を明らかにし、科学的に社会主義を実現するための理論を提示する使命を担って現われたのである。

マルクス主義の創始者たちは、このためマルクス主義理論を哲学的に科学的に裏づける唯物弁証法哲学とマルクス主義政治経済学を創始した。

チュチェ思想は、自己の運命を自主的、創造的に切り拓いて行くべき新たな歴史的時代の人民大衆の要求を反映して、人民大衆に世界の主人、自己の運命の主人としての地位と役割を担わせる使命をもって創始された。

チュチェ思想の構成と内容が新しくて独創的だということは、世界変革のための方法がチュチェ思想の不可欠の構成部分となっている点に示されている。

チュチェ思想は、世界に対する見解、立場、方法の全一体系であるが、この場合の方法とは、もちろん人民大衆が団結して世界を変革する方法のことであり、そのための正しい指導的原則に基づく指導方法のことである。

指導方法に関する問題は、労働者階級の革命闘争において重要な意義をもつ一つの問題である。

金正日書記は次のように述べている。

「指導方法の問題は、労働者階級の革命闘争において、理論的実践的に独自的な意義をもつ一つの問題であります」(「金日成主義の独創性を正しく認識するために」)

労働者階級の党は、指導方法の問題を正しく解決しなければ、人民大衆を自主性をめざす闘争へと正しく導くことができない。

マルクス・レーニン主義では、資本主義から社会主義への発展法則を解明することを主な課題としたため、指導方

法の問題を独自的な理論問題として提起しなかった。

レーニンの段階に至って指導問題が現実的な問題として提起されたが、それはまだマルクス主義の重要な構成部分とは認められず、単なる党活動上での規約とか運営などの方法的問題や、個別的活動家の政治的な手腕、品性にかかわる問題として提起されただけであった。

これは、一方では大衆の指導問題が当時においては実践的に切実な問題として熟しておらず、また従前の理論が、思想の基本的任務は人間の運命開拓の方途を示すことである点に十分な関心を払わなかったからである。

これに対しチュチェ思想は、人民大衆の運命開拓の方途を示すことをその基本的な任務とみなし、世界変革の方法を労働者階級の革命思想の重要な構成部分として新たに提起し、大衆指導におけるあらゆる基本的問題に解答を与えたのである。

党・領袖・大衆の統一は、主体である人民大衆の自主性を保障するうえでの基本条件である。党・領袖・大衆の同志的関係は、思想的意識的に結ばれる関係であり、この関係を強化するには大衆の思想・意識水準を高めることが重要である。三者の統一と団結の水準は結局、まず思想・意識の水準によって規定されるが、とくに領袖と党の指導的役割によって規定される。

また革命と建設は代を継いで行われるものであり、ここに領袖の後継者問題が提起されざるを得ない。朝鮮においては、この問題で深い研究がなされ、また実践的にも見事に解決されている。

いずれにしても、最も重要なことは、指導者を中心とする党の思想・組織水準の向上でりり、これがなければ、人民の指導者の選出問題や指導者の後継者問題の正しい解決は望むことができない。

チュチェの指導方法は、党と大衆の相互関係に対する科学的な分析をふまえて、大衆に対する党の指導は、人民大衆を革命と建設の主人の地位にしっかりと立たせ、その役割を円滑に果たすように組織し、動員する党の活動であること、および党の指導は、本質上、領収の指導にほかならないことを明かにしたのである。

チュチェ思想における世界変革の方法、とくに革命と建設の方法を学ぶにあたって、まず第一に解明しなければならないのは、党と領収と大衆の関係である。

歴史の主体、社会変革の主体、三大改造運動の主体は、常に人民大衆である。しかし人民大衆が主人としての地位を占め、主人としての役割を全うするためには、人民大衆の思想的覚醒と組織的な団結が不可欠であり、そのためには思想的統一と組織的な指導の中心がなくてはならない。思想的組織的な統一と団結の中心が強固であればあるほど人民大衆はさらに強力となり、主人の役割りをりっぱに果たすことができる。人民大衆が革命と建設の任務と役割を全うするためには、人民大衆は、自己の利益に合致する正確な闘争目標を掲げ、自主的な革命思想で武装しなければならない。人民大衆が思想的に目覚めず、古い思想から脱却できず、様々な思想に分裂していて、互いに違った要求を出しあうならば、人民大衆の統一は期待できず、共通の闘争目標を掲げて闘争することもできない。人民大衆がひとつの主体として登場し、ひとつの闘争目標を掲げるためには、必ず人民大衆は、ひとつの自主的な革命思想で武装しなければならない。

搾取階級と被搾取階級間には、利害関係の根本的な対立があるので、思想的統一は不可能である。しかし、人民大衆の利害は根本的に一致するため、人民大衆の根本的利益を正しく反映した自主的思想をもつならば、ひとつの思想で統一することが可能である。人民大衆の思想的覚醒と統一のためには、人民の真の利益が何であるかを自覚した少

数の先進分子の出現が何よりも必要であり、かれらを中心とした広範な大衆の意識化がなされなければならない。しかし思想的統一だけでは、人民大衆がひとつの主体となったとはいえない。思想の共通性は、利害の共通性を意味するにすぎない。したがって、思想の共通性だけではその実現に向けての行動の統一をはかることはできない。共通の利益の実現のためには、行動の統一が保障されねばならない。このため集団を構成している人民大衆の共同行動における各人の地位と役割の統一的な規定がなされねばならない。集団である人民大衆を構成する各人の地位と役割が明確に決定されたとき、人民大衆は一つの社会的運動の主体として組織化されたということができる。しかしこれは簡単なことではない。大衆の意識化組織化のためには、まず先進分子を思想的組織的に結集し、中核部隊を編成し、その周囲に大衆を結集しなければならない。すなわち、この中核となる先進分子のほかならぬ革命的な党である。そしてこの党の思想的組織的中心が人民の指導者であり、共和国ではこの指導者を領袖と呼んでいる。

人民の領袖は、党と人民大衆の思想的統一の中心である。人民の領袖は人民の自主的な革命思想のもっとも完全な体現者として人民大衆の利益をだれよりも正確に、遠くまで見通し、それを断固として擁護し闘う人民の利益の忠実な代表者である。人民にたいする限りない忠実性こそ、人民の領袖が持つべき第一の資格である。人民大衆を熱烈に愛し、人民大衆の自主的な利益を反映した革命思想を創始した思想家を人民が人民の領袖として深く敬愛する理由がここにある。人民の領袖は党と大衆の指導の中心である。人民の領袖は、人民大衆の要求と利益をひとつに統一させるばかりではなく、その実現をめざす闘争に人民大衆を統一し組織動員する。このことをなしうる指導能力こそ、人民の領袖がもつべき重要な資質である。大衆指導の本質は、大衆の要求と知恵を一つに集め、正しい闘争目標を掲げ、その実現のために大衆の革命的熱意と創造力を最大限に奮起させるところにある。いいかえれば、大衆指導の秘

訣は、万が千に、千が百に、百が十に、十が一つになるように大衆の要求と知恵を集中させ、一人が十人、十人が百人、百人が千人、千人が万人を動かすように、人々を奮起させるところにある。

党と領袖と大衆は一つに統一されて自主的な主体を形成する。人民大衆の要求と知恵が集中され、人民大衆の行動を指揮するという点で、人民の領袖は主体である人民大衆の脳髄であるといえる。そして党は、人民大衆の統一と団結を保障し、人民大衆の創造的活動を指導するための組織体として、人民大衆の中核部隊であり、かつ指導的力量である。

党と領袖と大衆の関係においてもっとも重要なのは同志的関係である。同志的関係と平等的関係は互いに矛盾するものではないが、異なった側面をもっている。平等なくして同志的関係はない。支配者と被支配者、搾取者と被搾取者間には同志的関係はありえない。平等の関係や同志的関係の前提である。社会的集団を構成する人民大衆の相互関係は平等の関係であり、従属の関係は許されない。主人の下僕のような関係はありえない。平等の関係は、相互尊重、相互不可侵、等価交換の関係であり、ギブ・アンド・テイクが作用し、他人にやりっぱなしの一方的義務はない。平等であるからといって、必ずしも互いに愛しあうようになるとか、不平等であるから互いに憎しみあうような関係になるとかはいえない。愛と憎しみの関係にあっても平等的関係を保ちあうことはできる。この点で、平等の関係と同志的関係は、正義と善との関係に相当する。社会的集団を構成する人民大衆の関係は、構成員一人一人が自主的なのでいかなる支配も従属もない。しかし、だからといって平等の関係だけではない。ひとつの運命共同体を形成する同志的関係である。ここでは同志的愛、革命的信義の原則が支配する。

人民大衆は、個人の単純な結合体ではなく、ひとびとの生命が、互いに結合し、運命をともにするひとつの大きな

社会的生命体を形成している。

世界を改造する方法、革命と建設の方法についてはまだ多くの論議を尽さなければならないのであるがすでに紙数もない。

ＤＰＲＫで注目すべきことは、とくに領袖とその後継者の地位と役割に対する科学的解明に基づいて、領袖とその後継者の唯一的体系をうち立てることを革命的指導の基本原則として新たに明示し、それを具現するうえで提起される重要な問題を全面的に解明したことであろう。またさらに注目すべきことはＤＰＲＫでは大衆路線を具現した革命的活動方法と人民的活動作風を大衆指導方法の基本内容として提起し、それを確立するための重要な問題を全面的に明らかにしていることであり、このことによって、真の哲学・思想は世界を認識するにとどまらず、それを変革することであるという要請に、チュチェ思想は歴史上はじめて全面的に応えていることである。

チュチェ思想が革命と建設の方法を明かにし、これを、世界に対する見解、立場、方法の全一体系として自己の不可欠の構成部分に位置づけたところに、従来の革命理論には存在しなかったその独創性を私たちはみるのである。

以上、チュチェ思想とマルクス・レーニン主義の対比において最終的な結論としていえることは、チュチェ思想は階級的使命と理念の共通性からマルクス・レーニン主義と深いつながりをもっていながらも、その根本原理と構成、内容からみて、マルクス・レーニン主義の枠内では解釈しえない新しい独創的な思想だということである。